

磨

玉の織りなす原色の世界

く



暗い工房の片隅で、
ほのかな灯をたよりに、
匠は、ただ、ひたすら玉を磨く。
水を注ぎ、砥石を替え、
何十分も、何時間も……。

原石はしだいに輝きをおび、
しだいにそのかたちを現していく。

穴が開き、玉が完成したその瞬間、
匠は深く溜息を吐き、
そして、かすかに微笑みをもらった……。

棺に敷かれた朱の真紅と、
さまざまな色の玉が放つ輝きとの織りなす
コントラストは、
現在の我々さえをも魅了する。
古代人にとっては、
まさに神秘の輝きであったに違いない……。